

五山

原田 正俊*

五山制度の概要と研究史

日本の五山に関する研究は、仏教史・文化史・政治史研究の各方面から進められてきた。日本の仏教が宗派ごとに発展してきたことにより、五山の歴史は室町時代の禅宗が諸宗派と並び社会的な地位を確立した時期として論じられてきた。戦国時代になると大徳寺・妙心寺といった林下（山鄰派）が勢力を拡大するが、禅宗が社会に及ぼした影響力の大きさからも中世における五山は際立っており、五山研究は、禅宗史研究の中核とも考えられてきた。

長年、禅宗史研究を主導した玉村竹二は、史料を博搜しながら五山制度史、伝記研究を進めていった（個別論文は後掲）。また、今枝愛真によって全国規模で広がる五山・十刹・諸山の全体像が明らかにされていった（今枝1970）。

日本の五山は、13世紀末から禅宗寺院の格付けとして整備されたものとしてみられている。鎌倉時代末の五山の制定がどの程度進んでいたのかは不明な点が多いが、北条得宗と関係の深い北条時頼創建の建長寺、北条時宗創建の円覚寺などが五山の称号を与えられていたと考えられ、北条貞時の代には鎌倉浄智寺も五山に列せられた。禅宗に帰依した北条得宗（北条氏の家長）主導のもと南宋禅林の制度が採用されたのである。南宋五山が宰相史弥遠の意向で指定されていたことと合わせみると、日本においては、北条得宗が五山制定の牽引役であり、同様の過程で国家的なものとして整備されていったといえる。

*関西大学文学部教授

京都においては、摂関として政治力を持った九条道家による東福寺造営、龜山上皇が創建した南禅寺といった寺院は、有力な禅寺として注目された。とりわけ南禅寺は、天皇家が檀越になり、歴代大覚寺統の天皇が関与する寺として整備され、禅宗史のなかでも画期といえよう。鎌倉時代後期は、モンゴル襲来期であり緊張した対外関係の状況下であったが、公家武家ともに中国禅宗への関心が高まっていたことは重要である。

また、鎌倉時代末から南北朝時代にかけては蘭溪道隆・無学祖元・大休正念・西礪子曇・一山一寧など多数の南宋・元の禅僧が来日しており、大陸五山の情報は直接届いており、渡来僧の時代でもあった。入宋経験のある僧も多く、東福寺開山円爾については南宋五山第一位径山、無準師範のもとで法を嗣いだこともあり、五山の権威をよく知るものであった。円爾は北条時頼の帰依を受け、蘭溪道隆来日後、建長寺に弟子十人を派遣しており、円爾こそ京都・鎌倉を結ぶ人物であった。公武が並行して五山を構成する禅寺を創建・整備していった（原田2014）。

南北朝期、後醍醐天皇による建武の新政においても禅宗寺院の格付けが行われ、大徳寺や南禅寺が五山の第一に位置づけられた。鎌倉幕府から朝廷への政権の移行によって、五山の認定が天皇に主導されるようになった。この時期、後醍醐天皇のもとで五山に認定する寺院の性格について議論があり、東福寺が円爾の門派聖一派の徒弟院（門派内での継承寺院）であること、九条家の墓の追善を主とする寺であるとのことで、五山から除かれることになった。この時、東福寺の学僧、虎関師錬が反論して、五山の資格を論じている。これによれば、一に檀位（檀越の地位）、二に巨構（伽藍の規模の大きさ）、三に久創（禅寺としての歴史と由緒）が必要とされている。中国では、墳寺を五山にすることはないが、日本においては後述するように葬儀追善と五山僧との関わりは深く、日本の五山は中国禅林とは別途の宗教的機能をもつといえる。

足利尊氏が幕府を開くと、暦応5年（1342）に五山の位置づけが整理され、第一建長寺・南禅寺、第二円覚寺・天龍寺、第三寿福寺、第四建仁寺、

第五東福寺となった。浄智寺は准五山とされた（『扶桑五山記』）。鎌倉優位の配置で、十刹についても定められ、第一浄妙寺（鎌倉）、第二禅興寺（相模）などが列挙された。五山が必ずしも五カ寺を指すのではなく、寺格を示すものであることが明確になった。

足利義満によって、相国寺が創建されると、至徳3年（1386）五山位次の改訂が行われる。五山之上南禅寺、第一天龍寺、建長寺、第二相国寺、円覚寺、第三建仁寺、寿福寺、第四東福寺、浄智寺、第五万寿寺、浄妙寺、となった。室町殿に隣接した相国寺には、鹿苑院が創建され、五山以下の諸寺の人事を司る僧録が置かれた。やがて禅林行政の実務は相国寺蔭涼軒に移り、後々蔭涼軒主は室町幕府の政治にも関与する地位となった。足利義満の代には、室町殿（足利將軍家の家長）が公家社会を圧倒し、公武合体の政権となった。政治体制を反映して、京都優位の体制が出来上がった。この後、室町幕府は16世紀後半まで守護大名や有力被官の申請を受けて十刹・諸山を認定し続けた。

五山住持の任命については、南北朝期には天皇家や摂関ゆかりの寺は綸旨や摂関家御教書が出されることもあったが、次第に足利將軍が発給する公帖（御判御教書）によっての叙任が基本となる（玉村1975）。十刹・諸山についても住持の任免は、幕府の重要な権限であった。住持職の任命に当たっては、官銭・礼銭が幕府・鹿苑院・蔭涼軒に納められ重要な財源でもあった。五山住持の任命は、室町幕府の後、豊臣政権、徳川幕府が主体となり、武家政権が継承していく。

僧伝研究

五山研究のもう一つの大きな流れは僧伝研究である。日本の禅僧たちは、中国禅林に倣って有力な僧の行実を編纂した。弟子は行状や碑銘といった形で僧伝を編集した。また、常日頃の法語偈頌もあわせて語録が編纂された。これによって禅僧の伝記は他宗派の僧侶と比較して史料がのこるので

ある。禅宗に文字通りの高僧が多かったわけではなく、史料の残存を考慮しながらの諸宗との対比が必要である。

僧伝研究では、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（思文閣出版、新装版2003年）は、五山僧の経歴をみる上できわめて有益な研究である。同氏編『五山禅林宗派図』（思文閣出版、1985年）とあわせて五山研究の一つの到達点を示している。ただ、法系についても時代が下って法系が分節化しにくくなかで、ある特定の禅僧を祖師として門派の結束が図られることがある。日本において無学祖元（仏光国師）の法系は、仏光派と呼ばれるが、夢窓疎石の弟子たちのなかで、自門派こそが仏光派の正嫡であるとの主張が高まり、様々な頂相や伝記中の作為が生じた（原田2014c）。法系については、燈史と同様いわば作られた系譜・歴史が存在すると注意しなければならない。また、蔭涼軒主亀泉集証の伝記なども明らかにされており（今泉2012）、五山僧の生活全般への言及もある。このように五山研究は、制度史・僧伝といった方面で着実に研究が積み重ねられてきた。

日本仏教のなかの五山

日本の仏教史研究全体が宗派史的な枠組みにしばられてきたことへの反省もあり、日本仏教史のなかに五山禅宗を如何に位置づけるかの視点からの研究も現れてきた。日本の中世においては、古代以来の南都六宗・天台宗・真言宗の顕密八宗が中世仏教として大きな勢力をもち、いわゆる鎌倉新仏教は社会的な影響力も限られていた。日本史の研究のなかで顕密体制論といった考え方である（黒田1975）。

五山が台頭するなか、国家と密接に結びついた顕密八宗の体制がどう変化するのが問題となってきたのである。五山の社会的な地位向上については、延暦寺・興福寺・醍醐寺など顕密の諸大寺と同等に引き上げるため、鎌倉時代後期から摸索がなされ、御願寺認定さらには太政官符を発給し役夫工米免除などの文言を入れた特権付与がなされた。公武の承認のもと寺

格を上昇させることができた（原田2007）。

14世紀前半に、五山禪宗が力を持つと顕密諸宗との対立は顕著なものとなり、激しい嗾訴起こった。延暦寺が顕密諸宗に呼びかけて禪宗を批判する訴状が出された。康永3年（1344）からの山門嗾訴では、天龍寺と夢窓疎石が批判的となり、応安元年（1368）の山門嗾訴では南禅寺三門が破却され、夢窓の弟子、春屋妙葩が批判の対象となった。訴状を見ると顕密諸宗と禪宗の対立点が浮かび上がる。顕密諸宗からみれば、朝廷から叙任される僧綱位から除外されている禅僧が大僧正などと同等に振る舞うことは到底認めることができなかった。また、夢窓疎石の『夢中間答集』が世間に流布すると、密教修法は不要といったその主張が問題化された。また、禪宗側が主張した釈迦以来の伝法は顕密側からすれば容認できず、一宗としての独立を認めることはできなかった。顕密側は黒衣の禅僧が天下の祈禱ができるわけがないとし、禪宗の法会の効力を否定した。日本の神祇との関係についても問題視して、禪宗は宋国を滅亡に導いた宗であり、禪宗擁護の神はいないとの主張であった（原田1997）。

禪宗は中国禪の清規にもとづいた法会の体系を持ち、顕密諸宗の法会とは別系統のものであった。日本の古代・中世前期においては、国家的な法会は顕密八宗が担当するものであり、新たな禪宗の法会は、正統なものではないとの意識があった。しかし、中世後期になると次第に禪宗の法会が社会のなかで重要なものとして意識され、祈禱の分野でもその力を発揮していく。禪宗は天皇の聖寿万安を祈る祝聖を行い、将軍に対しては誕生日祈禱を行った（原田2014b）。また、五山・十刹などにおける新住持の入寺儀式では、天皇・将軍・檀越への祈禱が表明された。五山官寺の祈禱体制については、将軍家御願寺・相国寺の機能も含め、議論が進んでいる（細川2004）。

さらに禪宗側は、鎌倉時代末以来、神祇との関係を深めることによって地域社会に浸透していくことを戦略的に進めた。禅僧たちは日本の神を化度した説話や託宣記を流布させている。東福寺には、はやくから鎮守が置か

れたように、大陸風の五山境内に大陸の伽藍神とともに日本の神々が祀られることは一般になっていくのである。

禅僧が営む法会の中でも、葬儀は社会的な影響力が大きかった。禅宗によって大陸様の葬儀が日本に広がっていくことは注目される。禅宗は、大陸の清規を日本社会に持ち込むなかで、南宋禅林で行われていた葬儀次第を日本でも広め、鎌倉時代には北条得宗周辺でこの葬法が営まれ、入棺から荼毘、さらに肖像画を掛けての追善など、盛大な葬儀と追善が俗人に向けても行われた。南北朝期には一時期天皇家にも用いられ、次第に権威ある葬法として日本に定着していった。足利將軍家歴代、近親者の葬儀は禅僧が執行することが基本で、追善は顕密諸宗、禅宗で営まれた（原田2003）。

葬儀・追善に使用される位牌や禅僧の頂相に倣った肖像画も上流武家にとって、必須のものとして受容されていった（2017）。日本における葬儀・追善のなかで禅宗の法会様式は次第に比重を占めていき、中世後期から近世初頭に掛けて諸宗派の儀式法会が整備される過程で、五山禅宗の法会の影響は大きかった。今後、各宗派の歴史的展開のなかでの影響関係の解明が課題である。

中世社会の構造と五山

五山の住持が、南宋禅林の制度にならって十方住持制といった、禅宗諸門派からの人材登用を行ったことは早くに注目されていたが（玉村1976）、こうした制度が日本の中世社会に持つ意味合いを考えることが課題となった。顕密諸大寺の座主や長吏、顕密諸宗派の門跡は、堅固な身分制の下で、貴種の入寺が普通であった。有力寺院についても、師弟間の相承が一般であり、寺院社会の貴族化、人材登用の停滞が生じていた。こうしたなか、五山では「器量の仁」の登用がうたわれ、五山の登場によって宗教界における人材登用の大改革が起こった。公家に対して低位に置かれた武家、地

方武士出身者の禅僧が登用されていった。こうした、五山全体の運営について、室町幕府の法による保証のもと、禅宗独特の寺院法が整備されていた。五山の住持以下の役職が遷替の職として位置づけられたことは、寺院社会はもとより中世社会において画期的なことであった（原田1998）。

また、中国禅林において整備された清規が、日本に持ち込まれ、これが五山各寺院の運営の基本であり、やがて日本に適合した形で改変されていく経過も重要である。栄西は『興禅護国論』のなかで戒律に代わるものとして清規の導入を主張し、禅僧の持戒持律を主張した。日本の中世社会において、世俗化した顕密寺院と対峙するものとして、公武政権によって禅律寺院の興隆が支持されたのである。

この意味において、禅僧は規律のとれた僧侶集団であり、武装についても南都北嶺のように強大な武力を持つことはなかった。もっとも、寺家大衆の住持に対しての蜂起や東班衆の蜂起の事例はみられ、自力救済が基本の中世において集団による意思表示や武装は現実にはあった。しかし、室町幕府が五山に対して厳しく武装の取り締まりを行ったことも事実である。

南都北嶺をはじめとした顕密諸宗は、朝廷・幕府と鋭く対立する局面が多々あったが、五山僧は、権力側からみればきわめて従順な僧侶集団として発展し、幕府が人事に大きく関わることから、文筆を主とする文官のような役割を果たすようになった（原田2008）。南宋禅林にならって「臣僧」と名のる者もあり、文字通り権力に従順な僧団となった。中世社会において、王法と仏法は補完し合いながら社会秩序を維持することを目指したが、両者は対立することもしばしばあり、仏法の独立性は大きかった。しかし、室町時代に五山が成立することによって王法に従属する仏法としての色彩が強くなった。また、五山の出現によって朝廷が任免する僧綱制による秩序と別個の武家政権の任免による系列が出来上がったことも大きい（原田1998）。

文官としての働きは、外交のなかで大いに能力を発揮した。鎌倉時代以

来、大陸の事情をよく知り、人脈もあった禅僧は外交に積極的に関わってきた（伊藤2014）。五山の繁栄期を作り上げる夢窓の弟子、春屋妙葩なども入明経験はないものの、大陸の禅僧との頻繁な交流があり、幕府の対外認識を形成するのに寄与したのである（村井1988）。室町時代には、鹿苑院・蔭涼軒を中心に五山僧が外交文書の作成、対外交渉にあたり、四六駢儷文の作成能力をかわれて外国文書の起草にあたった。

経済史の上でも五山が持つ意味は大きく、五山領荘園は将軍家御料所と同様に保護されたといわれる。五山寺院史料ののこり方から五山領荘園の実態は顕密寺院と比べて不明な点が多いが、荘園経営に携わる五山内東班衆の活動は古くから注目されている。東班衆は、多額の資金運用を行い、将軍に貸し付けることもあった。幕府からの多額の課税にも対応する存在であった。また、公家や顕密寺院の荘園の運営に関わる庄主として現地にまで赴き経営に当たった（藤岡1960・今谷1975）。経済面では、五山塔頭・寺庵の祠堂銭貸し出しも中世後期の社会において金融の大きな担い手であった。こうした方面の位置づけも今後の課題である。

近年の研究動向としては、十刹・諸山についても個々の寺の実態解明が進められている。特に五山塔頭、洛中洛外の寺庵は守護大名の京都における菩提寺として成長する寺院が多数あった。各大名領国においても法系を同じくする有力な五山派寺院が造営された。こうした京都と地方を結ぶネットワークとしても研究が進められてきている（早島2019・山田2019）。

思想と学芸

こうした五山全体がどのような思想を人々に説いたのか、総合的な思潮はどのような特色があるのかの検討は今後必要である。顕密諸宗と対立的であった禅宗が次第に体制化し、また浄土教との融和もみられた。五山内で語られた、一遍上人参禅説話なども、禅宗の優位を説くと共に浄土教の教えを包含する総合仏教へと変容していったともいえる（原田1998）。室

町仏教と五山禪宗の思想的な位置づけは課題である。芸能や文化への影響はこれまでも度々指摘されるが、禪僧たちのどういった言説が受け入れられ、この時代の思想形成に寄与したのか再検討が必要である。

五山僧による儒学の講義も盛んに行われたが、従来宋学の紹介者としてふれられるが、独自思想の展開があるとはされない。ただ、訓読の広がりへの寄与といった点が指摘されている（中村2014）。五山僧による儒仏一致論も指摘されているが、社会への影響力の検証は必要である。また、禪僧の講義なかで莊園経営・農業・数学などの知識が伝授されていたことも指摘されており、禪僧が提供した知識の広がり大きい（川本2021）。

紙幅の制約もあり紹介できなかった研究もあるが、著者の問題関心にもとづき研究史の大きな流れと論点の変遷を示した。今後、五山研究が活性化し、中世後期仏教史全体の構造を明らかにしていくことが課題である。

【参考文献】

- 今泉淑夫（2012）『亀泉集証』吉川弘文館、pp.1-256
- 今枝愛真（1970）「中世禪林の官寺機構—五山・十刹・諸山の展開—」『日本禪宗史の研究』東京大学出版会、pp.139-268
- 今谷明（1975）「東班衆の世界」『戦国期の室町幕府』角川書店、pp.11-60
- 伊藤幸司（2014）「海域ネットワークのなかの五山」島尾新編『東アジアのなかの五山文化』東京大学出版会、pp.53-77
- 川本慎自（2021）「禪僧の莊園経営をめぐる知識形成と儒学学習」『中世禪宗の儒学学習と科学知識』思文閣出版、pp.60-90
- 黒田俊雄（1975）「中世における顕密体制の展開」『黒田俊雄著作集』第二巻1994年、pp.45-182
- 玉村竹二（1975）「公帖考」『日本禅宗史禅宗』下之二、思文閣出版1981年
- 玉村竹二（1942）「五山叢林の十方住持制に就いて」『日本禅宗史禅宗』上、思文閣出版1976年、pp.249-270
- 中村春作（2014）「五山のゆくえ—思想史研究の視点から」島尾新編『東アジアのなかの五山文化』東京大学出版会、pp.253-277
- 早島大祐（2019）「武家菩提寺をめぐる仏事と政治—祈願寺・京菩提寺・天下祈

- 禱—」早島大祐編『中近世武家菩提寺の研究』小さ子社、pp.11-38
- 原田正俊（1997）「中世後期の国家と仏教」原田正俊『日本中世の禅宗と社会』吉川弘文館1998年、pp.335-374
- 原田正俊（2003）「中世禅宗と葬送儀礼」東京大学史料編纂所編『前近代日本の史料遺産プロジェクト 研究集会報告集2001-2002』、pp.129-143
- 原田正俊（2007）「中世仏教再編期としての一四世紀」『日本史研究』540号、pp.40-65
- 原田正俊（2014a）「円爾—公武の帰依と南宋文化—」平雅行編『公武権力の変容と仏教界』清文堂、pp.339-352
- 原田正俊（2014b）「皇帝の誕生日法会から室町將軍の誕生祈禱へ」佐藤文子・原田正俊・堀裕編『仏教がつなぐアジア 王権・信仰・美術』勉誠出版、pp.107-134
- 原田正俊（2014c）「南北朝・室町時代における夢窓派の伝法観と袈裟・頂相」原田正俊編『日本古代中世の仏教と東アジア』関西大学出版部、pp.65-96
- 原田正俊（2017）「日本中世の位牌と葬礼・追善」『宗教と儀礼の東アジア』勉誠出版、pp.60-76
- 藤岡大拙（1960）「禅院内に於ける東班衆について」『出雲学への軌跡』今井書店、2013年
- 細川武稔（2004）「禅宗の祈禱と室町幕府—三つの祈禱システム—」『京都の寺社と室町幕府』吉川弘文館2010年、pp.181-214
- 村井章介（1988）「春屋妙葩と外交—室町幕府初期の外交における禅僧の役割—」『アジアのなかの中世社会』校倉書房、pp.294-311
- 山田徹（2019）「大名家の追善仏事と禅宗寺院」早島大祐編『中近世武家菩提寺の研究』小さ子社、pp.39-80

*論文発表後単著に収録されたものは（ ）で初出年を示し、最後に単著刊行年を入れた。増補がある場合は収録本刊行年とした。